



\*TOHOKU UNIVERSITY\*

2007

# 東北大学百年史 編纂室ニュース

## 第6号 2000.8.1

### 東北大学百年史編纂室

#### 本学の理念を歴史に学ぶ

東北大学副総長・東北大学百年史編纂委員会委員長 馬渡尚憲 — 2

部局史編纂委員会名簿(変更分) — 4

#### ●点描・百年史

斎藤善右衛門翁と東北大学 — 5

東北大学百年史編纂室日誌抄録 — 8

#### 表紙写真解説

#### 財団法人 斎藤報恩会旧本館

財団法人斎藤報恩会は、多大な経済的援助を本学に行ってきた。この写真は財団の旧本館である。竣工は昭和8年6月。鉄筋コンクリート3階建、外壁は秋保石張りであった。設計・監督は小倉強(1893~1980 当時仙台高等工業学校建築科教授のち東北大学教授)であった。昭和48年4月に建て替えのために取り壊された。

本号「点描・百年史 斎藤善右衛門翁と東北大学」参照。



## 本学の理念を歴史に学ぶ

東北大学副総長

東北大学百年史編纂委員会委員長 馬渡尚憲



大学の個性とかアイデンティティが求められる時代である。東北大学においても最近そういう議論が強くなっているように思われる。画一的になった大学像から抜け出て東北大学としての特色を持たねばならないという議論である。

この議論には同感できる点もあるが、一種のとまどいも感じる。東北大学には立派な伝統や個性があるのではないかということである。私のように着任して26年、東北大学の良さに感じ入り、ますます愛着を深めている者からは、この伝統や個性をもっと自覚しもっと明示しもっと外に向かって主張したらよいとしか思えない。

東北大学の個性を自覚する上で、一番いいのは、東北大学の歴史をひもとくことである。例えば、『東北大学五十年史』をみればいい。記念資料室を訪ねればいい。あるいは、片平キャンパスを歩くことも一考である。片平キャンパスはもと文部省直轄の旧制第二高等学校の敷地であり、二高の門扉（遺生研前）、物理学教室（本部事務局左手裏・職員集会所）、書庫（施設部前：現文学部考古学資料収蔵庫）があり、また魯迅が学んだ仙台医学専門学校の階段教室と博物理化学教室（旧保健管理センター：現教務情報システム開発室・移転整備調査室）がある。これらに接すると、東北大学を築いてきた人々の考え方や息吹が伝わる。

なかでも『五十年史』は興味深い。編集委員長の中村吉治先生は「中村史学」（共同体論）で有名な経済学部の先輩である。『五十年史』は人物やその考えをよく伝えているし、東北大学をめぐる状況の記述も生き生きしている。例えば、設置は古河家の寄付で実現したが、3番目の帝国大学を仙台に置くことに奔走したのは宮城県（設備備品の寄贈もした）や仙台市であり、すでに発刊されていた『河北新報』も創設の模様や祝賀会の様子をわがことのように喜んだ記事を載せている。本学は地元の多大な情熱に支えられて創設された。



中村吉治  
(1905～1986)



『東北大学五十年史』  
(1960年刊)

「研究第一主義」と「門戸開放」は、初代総長・沢柳政太郎まさたろうと第2代総長・北条時敬ときゆきの時にすでに固まった。沢柳総長は、内に学術研究第一主義、外に傍系入学（高等学校卒業者以外からの入学）いわゆる「門戸開放」を説き、また「実用忘れざるの主義」を説いた。北条総長は、「門戸開放」に従ってすでに沢柳総長が用意していた女性の入学を、文部省の大いなる困惑を後目に許可した。

そのころから約90年がすぎたが、色々な機会に「研究第一主義」と「門戸開放」が引き合いに出されてきた。「実用主義」も時々引き合い

に出されてきた。私が驚くことは、現在でもこの3つは本学の理念や指針として機能しうるし、今後もますます重要になるのではないかということである。世界一流の「研究大学」の指針として立派に機能しうる。

「研究第一主義」に対して時として教育軽視ではないかという声が聞かれる。これは沢柳総長の趣旨とは全くかけ離れた理解である。沢柳総長のいう「学術研究」は教授も学生も一緒になってやるもので、「教育」と区別された研究ではない。大学が教育機関であることは大前提なのである。では何に対して「第一」なのか。それは、政府助言や官僚養成など、大学の政府補助機能に対してである。これに対して、東北大学は教授も学生も「研究第一主義」でいくと唱っているのである。地理的にそうあらざるを得ないということもあったであろうが、むしろ地理的な特性を生かして、研究教育第一主義の本当の学問の府を築いていこうというメッセージが「研究第一主義」である。

「門戸開放」は、当時は傍系入学や女性の入学を意味したが、東北大学に人を受け入れる際、実力以外の何ものでも区別しないという精神ととれる。現在ならばさしずめ、他大学からはむろんのこと、外国人・女性教官の任用、外国人学生や社会人学生の受け入れを行うことではなかろうか。「門戸開放」はどこからでも有能な人材を入れることが、大学の活力と発展の源泉であることを見抜いている。

「研究第一主義」においてその「学術研究」は何のためにという問いに答えているのが、沢柳総長の「实用忘れざるの主義」ではないかと思われる。だから、本学の「实用主義」は、「学術研究」すなわち研究教育が、政府のその時々々の要求に直接応じるような有用性ではなく、もっと広く普遍的に人間や社会・産業にとっての有用性や効用をもつべきことを説いているように理解される。

人が歴史に学ぶことがいかに少ないかが歴史の教訓であると言われる。そこで私なりに、本学の理念を『五十年史』に学ぶとこのようになる。『百年史』は東北大学の次の100年への多くの示唆を含むであろうと期待される。

### 片平キャンパス



# 部局史編纂委員会委員名簿

(変更のみ 平成12年5月現在)

## 教育学研究科

- 委員長 水原 克敏(教授)

## 経済学研究科

- 委員長 大滝 精一(教授)
- 委員 長谷部 弘(教授)
- 川端 望(助教授)

## 理学研究科

- 委員長 山口 晃(教授)
- 委員 高木 泉(教授)
- 田村 眞一(教授)
- 渡辺 彊(教授)

## 薬学研究科

- 委員長 大島 吉輝(教授)
- 委員 後藤 順一(教授)
- 伏谷 眞二(助教授)

## 工学研究科

- 委員長 太田 照和(教授)
- 委員 三浦 尚(教授)
- 中塚 勝人  
(未来科技共研センター長)
- 三浦 隆俊  
(環境保全センター長)
- 羽根 一博  
(バンチャー・ビジネス・ラボラトリー長)

## 農学研究科

- 委員長 前 忠彦(教授)
- 委員 山崎 慎一(教授)
- 大鎌 邦雄(教授)
- 山岸 敏宏(教授)
- 秦 正弘(教授)

## 国際文化研究科

- 委員長 竹中 興慈(教授)

## 言語文化部

- 委員長 大友 義勝(教授)
- 委員 大島 徹(助教授)

- 鈴木 道男(助教授)
- 窪 俊一(助教授)

## 金属材料研究所

- 委員 井上 明久(教授)
- 委員 齋藤 楨雄(総課長)

## 科学計測研究所

- 委員 島田 寛(教授)

## 流体科学研究所

- 委員長 小濱 泰昭(教授)
- 委員 新岡 嵩(教授)
- 圓山 重直(教授)
- 小林 秀昭(助教授)
- 花崎 秀史(助教授)

## 反応化学研究所

- 委員長 古山 種俊(教授)
- 委員 京谷 隆(助教授)
- 青木 純(助手)

## 遺伝生態研究センター

- 委員 亀谷 壽昭(教授)

## サイクロトロン・RIセンター

- 委員 馬場 護(教授)

## 東北アジア研究センター

- 委員長 吉田 忠(教授)

## 極低温科学センター

- 委員長 井上 明久(センター長)
- 委員 落合 明(助教授)

## 保健管理センター

- 委員 齋藤 秀光(助教授)
- 坂部 忠昭(厚課長)

## 学生相談所

- 委員 吉武 清實(助教授)

## 埋蔵文化財調査研究センター

- 委員 京野 恵子(研究員)

## アドミッションセンター

- 委員会 部局史編さん委員会
- 委員長 澤谷 邦男(センター長)
- 委員 夏目 達也(教授)
- 鈴木 敏明(教授)
- 倉本 直樹(助教授)
- 事務担当 学務部入試課専門員  
(アドミッションセンター担当)

## 附属図書館(含:分館)

- 委員 飯沼 一字(医分長)
- 宮崎 照宣(工分長)
- (部局史編さん委員会代表)
- 委員 東 高明(総課長)
- 三池慎三郎(管課長)
- 栃原 孝夫(医事長)
- 伊東 正勝(総補佐)
- 松井 好次(管専門)
- 石垣久四郎(調査研)
- 松元 義正(青分管)
- 相川 晶子(農分図)

## (旧)教養部

- 委員長 星宮 望  
(大教センター長)
- 委員 竹中 興慈  
(国際文化研究科教授)
- 国分 振(名誉教授)

## 事務局

- 委員 村上 昭夫  
(学生課長補佐)
- 村岡 哲男  
(企画課長補佐)

## 旧法文学部

- 委員長 玉懸 博之  
(文学研究科教授)



齋藤善右衛門 (1854～1925)

## 点描・百年史

# 齋藤善右衛門翁と東北大学

大正12年(1923)2月、東北有数の資産家である宮城県桃生郡前谷地村の齋藤善右衛門翁(1854～1925)は300万円を出捐し、財団法人齋藤報恩会を設立した。その事業目的は出資金の果実を東北地方の学術研究への助成金として交付することであった。

翁は神仏の信仰に篤く「財産は神仏よりの供託物にして私有物に非ず」との強い信念を持っていたので、財産を国のために還元する方法について、東北帝国大

学の小川正孝総長(1865～1930〔第4代：任期1919～1928〕)や井上仁吉総長(1868～1947〔第5代：任期1928～1931〕)に度々相談した結果、井上仁吉の「意見書」に基づき学術研究の補助金交付を事業目的とする財団法人の設置を計画したのである。

翁は既に明治34年(1901)8月に育英貸費事業の規則を仙台の養賢義会等になって制定し、広く東北各県より志望者を募り、評議員の選考により貸費を決定していた。財団法人齋藤報恩会の事業開始までに、総計246名に対し9万3千200円余の育英資金を提供し、俊秀の養成に尽力していたのである。

また、明治40年(1907)6月東北帝国大学の設立が決定したとき、仙台を東北の真の学都たらしめるには、当時の県立図書館の内容では到底及ばないと見て、宮城県立図書館新築全経費5万円、図書購入費1万5千円のほか、向後50年間年額3千円の図書購入費の寄付を申し入れたことは、齋藤翁が齋藤報恩会設立以前から東北の教育と学問について力を注いでいたことを意味し、宮城県図書館が全国的図書館運動のセンター館として重きをなしたことと無縁ではない。

大正12年(1923)当時、東北地方における学術研究主体は東北帝国大学以外では、わずかに高等学校・専門学校の教官を算える程で、齋藤報恩会の研究補助金の大部分は東北帝大がその恩恵に浴したのであり、本学として誠に幸いなことであった。財団法人齋藤報恩会の設立については、文部、大蔵、内務をはじめ全省庁の許認可が必要であり、翁が連日役所に日参した結果、ようやく実現したのであった。認可が難しかったのは、齋藤報恩会の事業目的が学術研究助成金の交付であること、また研究部門をもつ財団法人はわが国では当時前代未聞であったからだという。財団法人齋藤報恩会の設置が認可された以後、この種の財団の認可が早まったといわれている。齋藤報恩会に次いで認可された三井報恩会はその名称で、服部報公会はその事業内容で齋藤報恩会をモデルにしたといわれている。

財団への出捐金300万円の果実は、当時金利が7分で年額21万円が見込まれ、その6割を学術研究補助に、4割を産業振興と社会事業に充当した。昭和8年(1933)以降は博物館と図書館の経営も追加された。齋藤善右衛門翁は大正14年(1925)5月72才の生涯を閉じたが、財団は翁の遺志を堅く受け継いで事業を継続している。

財団の運営には齋藤初代理事長、小川正孝、井上仁吉両総長らの思想を具現するため、当時アメリカのウイスター研究所から本学理学部生物学科に着任したばかりの畑井新喜司教授(1876～1963)が参加した。齋藤報恩会の計画にカーネギー学術財団の定款が参照されているのは、畑井教授によると推測されるが、この点からも齋藤報恩会は、欧米、とりわけ新興著しいアメリカの学術財団をモデルにしていると思われる。

畑井教授は、現職のまま齋藤報恩会の学術研究総務部長を兼務し、初代理事長齋藤翁の意を体して研究補助金の申請を審査し、東北帝国大学に多大の補助金を交付した。

研究補助金の交付について「齋藤報恩会研究補助審査方針」(大正13年〔1924〕)は、以下のように掲げている。

- 一、共同的大研究ヲ奨励スルコト
- 一、継続研究ノ有望ナルモノヲ完成セシムルコト
- 一、新規ノ要求ハ既ニ他ノ方面ニ於テ研究進行中ノモノ及既ニ或研究ノ実績ヲ学術界ニ発表シタル研究者ノ申込ニ限り考慮スルコト
- 一、普通ノ文庫ノ購入及雑誌ノ欠号購入等ハ之ヲ認メザルコト
- 一、報恩会ノ補助ニ依ラザル研究報告ノ出版費ハ補助セザルコト



畑井新喜司 (1876～1963)

大正13年当時、自然科学を対象とする特殊研究者（5帝大、及び専門学校の教官）には、毎年15万円の研究奨励費（現在の科学研究費に相当すると思われる。一件当たり最高額3千円、最低額300円）が文部省から交付された。人数は、全国で177名、東北帝国大学は10名であった（『河北新報』大正13年8月23日）。このことから齋藤報恩会の研究補助金が如何に本格的な研究助成であったかが想像できよう。

「齋藤報恩会研究補助審査方針」は、近年本学が進めてきた特定領域横断研究組織(TURNS: Tohoku University Reserch Networks)を予告する思想の源流ではないだろうか。また、畑井教授が提唱した人類生物学(Human biology)もその一例である。人類生物学とは、生物学者だけでなく、人類学、衛生学その他社会学者の参加も得て、人間生活についての概括的法則を帰納せしめる学問である、と畑井教授は述べている。これは、戦後の新しい研究領域の展開を先取りした先進性を現してはいないであろうか。

財団が援助した継続的研究費の一例として、まず抜山平一教授が受けた補助金「電話に於ける送話強度明確度に関する研究」がある。これは大正12年度に3千円、13年度には5千円、そして同年八木秀次、抜山平一、千葉茂太郎3教授の共同研究「電気を利用する通信法の研究」の大型研究となり、昭和9年度までに合計22万5千円の補助金を受けている。

「又た齋藤報恩会から20万余の補助を受けて過去5ヶ年に顕著なる研究業績を挙げた電気通信法共同研究の永続を可能ならしめるために工学部附属電気通信研究所を設置する予算をも要求してある」（八木教授「其の後の工学部」『工明会誌』第11号）といわれているように、本学電気通信研究所は、齋藤報恩会研究補助金による研究が契機となり誕生したことになる。

金属材料研究所でも、昭和4～5年に低温研究部門創設のために10万円を、農学研究所は、戦時下でありながら設備費として昭和12～14年度に5万円、18年度に9千円の援助を受けている。

文科系でも齋藤報恩会から援助を受けている。報恩会の寄贈により本学の所蔵となった西欧碩学の個人文庫はヴント文庫をはじめ4文庫、3万8千冊ある。その内容は、哲学、美学、法学、心理学、史学等々人文科学全般にわたるもので、附属図書館において一大コレクションを形成している。これらはドイツが経済的混乱期の最中に売立てられたもので、中にはアメリカの著名大学と競合したものもあった。

また、多田等観（1890～1967）が本学に将来した西藏大蔵経579帙は質量ともに充実し世界的に著名であるが、これも報恩会の寄贈によるものである。報恩会は目録編纂事業も援助したため、本学は西藏学の文献センターとなっている。また、齋藤報恩会から研究補助を受けた多くの研究が学士院賞を受けている。

幼くして藩校養賢堂に学び、長じては福沢諭吉の著書を耽読して家業に精励した翁は常に報恩を心がけ、郷土の発展、とりわけ地元における学問研究の発展を願っていた。新たに事業を起す場合は全国の識者に意見を聴くなど、情報収集も万全であったが、井上、小川、畑井3教授らの、学問研究の姿勢を読み取り、全面的に東北帝大への援助を行なった。その大きさは測りしれない程であり、東北大学の今日あるのは、齋藤報恩会すなわち齋藤善右衛門翁の援助によるところが大きいものであることを、改めて銘記しなければならない。（文中敬称略）

小野 和夫（元東北大学百年史編纂室室員）

#### ●参考文献

1. 『齋藤善右衛門翁伝』 齋藤報恩会 昭和3年
2. 『財団法人齋藤報恩会要覧』 昭和54年
3. 『財団法人齋藤報恩会時報』 第1～213号 大正15～昭和12年
4. 『工明会誌』 第11号 東北帝国大学工学部工明会 昭和5年
5. 『河北新報』 大正10年9月24日 大正13年8月23日
6. 『同心』 第7号 東北大学附属図書館同人 昭和26年

1.財団法人斎藤報恩会による経済的援助の一例(『財団法人斎藤報恩会時報』より作成)

(1)電気通信研究所

| 研究事項                                  | 年度      | 金額(円)   |
|---------------------------------------|---------|---------|
| 抜山平一<br>「電話における送話強度と<br>明確度に関する科学的研究」 | 大正12    | 3,000   |
|                                       | 大正13    | 5,000   |
|                                       | 小 計     | 8,000   |
| 八木秀次・抜山平一・千葉茂太郎<br>「電氣を利用する通信法の研究」    | 大正13    | 10,000  |
|                                       | 大正14    | 40,000  |
|                                       | 大正15    | 40,000  |
|                                       | 昭和 2    | 40,000  |
|                                       | 昭和 3    | 40,000  |
|                                       | 昭和 4    | 40,000  |
|                                       | 昭和 6    | 7,000   |
| 小 計                                   | 217,000 |         |
| 合 計                                   |         | 225,000 |

(2)金属材料研究所

| 研究事項                       | 年度     | 金額(円)   |
|----------------------------|--------|---------|
| 本多光太郎・青山新一<br>「低温研究」       | 昭和 4   | 39,100  |
|                            | 昭和 5   | 62,800  |
|                            | 昭和 6   | 20,000  |
|                            | 小 計    | 121,900 |
| 大久保準三・増本量<br>「物質の磁性に関する研究」 | 昭和 7   | 20,000  |
|                            | 昭和 8   | 15,000  |
|                            | 昭和 9   | 15,000  |
|                            | 昭和10   | 15,000  |
|                            | 昭和11   | 10,000  |
|                            | 昭和12   | 6,000   |
| 小 計                        | 81,000 |         |
| 合 計                        |        | 202,900 |

2.部局別援助額一覧(昭和7~18年度)

| 部局      | 件数  | 金額(円)      | %      |
|---------|-----|------------|--------|
| 理 学 部   | 88  | 122,685.62 | 33.66  |
| 医 学 部   | 29  | 32,960.00  | 9.04   |
| 工 学 部   | 18  | 12,400.00  | 3.40   |
| 法 文 学 部 | 37  | 46,251.41  | 12.69  |
| 金属材料研究所 | 9   | 90,900.00  | 24.94  |
| 農学研究所   | 2   | 59,000.00  | 16.19  |
| 附属図書館   | 1   | 260.00     | 0.07   |
| 合 計     | 184 | 364,457.03 | 100.00 |

参考.戦前の大学教官の俸給(大正10年~昭和13年頃)

| 教官種別    | 本俸年額(円)     |
|---------|-------------|
| 教 授     | 2,500~      |
| 助教授     | 1,500~2,500 |
| 講 師     | 1,000~1,500 |
| 助 手     | 400~1,000   |
| 副 手(有給) | 200~ 400    |

(『東北大学理学部生物学五十年史』(1980年)より)

2000(平成12)年

●1月

- 11日 鈴木 明氏、菅野博之氏(理学部部局史実務担当)来室。
- 13日 法文学部史にかかる懇談会。
- 19日 大平五郎名誉教授(工学部)来室、資料寄贈。
- 21日 広島大学総合科学部助教授小池聖一氏、調査のため来室。
- 26日 筑波大学前史資料調査室助手山田恵吾氏来室。
- 31日 筑波大学前史資料調査室より『筑波大学前史資料調査室ニュースレター』創刊号寄贈。『東北大学編纂室ニュース』第5号発行。

●2月

- 3日 専修大学大学史資料室より『専修大学120年、1880~2000』寄贈。南山大学より『南山大学五十年史・写真集』寄贈。
- 4日 編纂室スタッフ会議。
- 14日 日本女子大学成瀬記念館より『成瀬記念館1999』No.15・『日本女子大学学園史ニュース』第3号寄贈。
- 21日 京都大学創立百周年記念事業委員会より『京都大学百年史』資料編第1巻寄贈。
- 22日 聖徳大学より『楽章II 聖徳学園シリーズコンサート第1000回記念誌』寄贈。
- 24日 第22回幹事会(11年度事業報告、12年度事業計画、12年度予算)。

●3月

- 6日 第12回百年史編集委員(通史専門委員会、11年度事業報告、12年度事業計画、12年度予算)。
- 編纂室スタッフ会議。
- 9日 財団法人斎藤報恩会への聞き取り調査。
- 13日 馬渡尚憲次期編纂委員長と今泉室長との話し合い(百年史編纂事業について)。
- 17日 百年史編纂委員会(11年度事業報告、12年度事業計画、12年度予算)。
- 31日 同志社大学社史資料室より『同志社談叢』第20号・『新嶋研究』第91号寄贈。小野和夫室員(事務補佐員)退職。

●4月

- 1日 香川郁子室員(教務補佐員)採用。
- 6日 國學院大学史資料課より『校史』第10号寄贈。
- 学習院大学五十年史編纂室より『学習院大学五十年史ニュース』第5号寄贈。
- 10日 編纂室スタッフ会議。

- 12日 北海道大学125年史編纂室より『北海道大学125年史編纂室だより』第3号寄贈。工学部史編纂室より『工学部編纂室通信』第4号寄贈。

- 13日 日本女子大学成瀬記念館より『新制日本女子大学成立関係資料—GHQ/SCAP文書を中心に—(日本女子大学史資料集—第6—)』寄贈。

- 17日 百年史編纂委員会(11年度決算報告)。
- 19日 立教学院史編纂室より『立教学院百二十五年史』資料編第4巻・第5巻・図録寄贈。
- 21日 東京都立大学より『東京都立大学五十年史』・『PHOTO都立大学の50年』寄贈。

●5月

- 8日 関西大学年史編纂委員会より『関西大学年史紀要』第12号寄贈。
- 11日 学習院大学より『学習院大学五十年史』上巻寄贈。
- 18日 編纂室スタッフ会議。
- 24日 学習院女子短期大学史編纂委員会より『半世紀 学習院女子短期大学史 図録』寄贈。
- 26日 広島大学50年史編纂室より『広島大学50年史紀要』第2寄贈。
- 29日 宮城学院資料室より『宮城学院資料室年報—信・望・愛—』第6号寄贈。

●6月

- 1日 大谷大学真宗総合研究所より『真宗総合研究所研究紀要』16号・『真宗総合研究所研究所報』No.37寄贈。
- 15日 竹内峯名誉教授(理学部)来室(イールズ事件について)。
- 編纂室スタッフ会議。
- 19日 半田恭雄名誉教授(言語文化部)来室(教養部史編纂のため調査)。
- 28日 高柳洋吉名誉教授(理学部)より資料寄贈(故高柳真三名誉教授関係資料)。
- 29日 財団法人斎藤報恩会への調査(資料借用)。

●7月

- 6日 筑波大学前史資料調査室より『筑波大学前史資料調査室ニュースレター』第2号寄贈。
- 10日 『百年史通史編纂のための研究会』(第10回)開催。
- 13日 編纂室スタッフ会議。
- 25日 『百年史通史編纂のための研究会』(第11回)開催。
- 31日 『百年史通史編纂のための研究会』(第12回)開催。

お知らせ

百年史編纂室ニュースに関するご意見・ご感想等がございましたら、百年史編纂室までお寄せください。また東北大学に関わる歴史的資料についての情報を、ご提供くださいますようお願いいたします。